

---

# バード

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バード

### 【Nコード】

N5406N

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ある村でとてつもなく強い化け物が暴れていた。その化け物退治を買って出たバードラディゲがしたこととは。歌もまた武器になります。

## 第一章

バード

ある村ではだ。今非常に困ったことになっていた。

その村の噂がだ。国の王都にまで届いていた。

「相変わらず暴れ回っているらしいぞ」

「ああ、あの巨大な化け物か」

「あれがなんだな」

「何でもな」

酒場でも食堂でもだ。人が集まる場所は何処でもその村の話でもちきりだった。そうしてそのうえでそこに出る化け物の話もされるのだった。

「剣も弓も効かなくてな」

「魔法もか？」

「ああ、全然らしいな」

こう話されるのだった。

「魔術師の魔法も僧侶の魔法もな」

「呪いを解くのもか」

「ああ、とにかく一切の攻撃が効かないらしいんだよ」

その化け物の話だ。とにかく何も効かないのだという。

「それで村に出て来て来て家畜を襲ったり家を壊したりしてな」

「大変だな、そんな奴がいて」

「とにかくな。退治してくれる人を探してるそうだけれどな」

「何も効かないんじゃないだろう」

「そうなんだよな。もう腕利きの戦士なり魔法使いなりが戦ったんだけれどな」

「駄目か」

「全然なんだな」

これは今も話になっていることからすぐにわかることだった。言

うまでもなかった。

「じゃあどうやって倒すんだ？」

「そんな奴な」

「一体どうやってだ」

「無理なんじゃないのか」

「こう言っただであつた。そうしてだ。」

結果としてこんな結論まで出てしまっていた。

「もうその村は駄目だろ」

「ああ、倒せない化け物が出たんならな」

「どうしようもないよな」

「村を放棄して逃げるしかないな」

「残念だけれどな」

こんな話になっていた。しかしである。

ここで一人の男が出て来たのだった。

それは白い見事な顎鬚を生やした初老のバードだった。身軽な、シーフが身に着ける皮鎧と腰には短剣がある。背中にはハープを背負っている。灰色の目をしており白い髪を後ろで束ねている。頭には白い羽根を飾った赤い帽子を被り赤い上着と白いズボンという井出たちである。そのバードが出て来て言うのである。

「いやいや、倒す方法がないモンスターはいませんぞ」

「えっ!？」

「あんだ、バードだよな」

「確か名前は」

「ラディゲです」

「こう名乗るのだった。」

「覚えておきなされ」

「ラディゲっていつたら」

「確か」

「バードの世界じゃ名の知れた」

「そうだったよな」

「おや、御存知でしたか」

彼は飄々とした様子で彼等の言葉に応える。

「私のことは」

「知ってるも何も有名人じゃないか」

「歌だけでなく魔法も戦いもできる」

「北の方で知らない者はいないだろ」

「左様ですか。私も有名なのですね」

ラディゲはその言葉を受けてだ。にこにことして述べるのであった。

「いや、有り難いことです」

「ハープを持たせれば右に出る者はいない」

「歌は国中に奏でられる。そのあんたがどうしたんだい？」

「はい、その村に行きましよう」

こつ言つのであった。

## 第二章

「今からです」

「おい、相手は剣も魔法も通じないんだぞ」

「そんな相手にか？」

「何をするってんだよ」

「まず申し上げておくことがあります」

「ラディゲはだ。その飄々とした口調をそのままにして彼等に話す。

「倒せない化け物はいません」

「まずはこのことを言うのであった。」

「決してです」

「決してですか」

「それは」

「はい、決してです」

「このことをはっきりと言うのであった。」

「それはありません」

「ではここは」

「どうするってんだよ」

「それは行つてわかることです。それでその化け物ですが」

「今度は化け物について尋ねた。その暴れ回っている相手のことをだ。」

「どういった相手なのでしょうか」

「何かスライムみたいな奴らしいな」

「やたらでかくてそれで身体は緑色に光っててな」

「目が一杯あるらしいな」

「ちよつとした音にも反応するしな」

「彼等はこう口々にラディゲに話す。ラディゲはここぞだ。音という言葉に目を微かに動かさせた。そうしてそのうえで話をさらに聞くのだった。」

「火も氷も雷も効かないってな」

「当然斬つても打つてもな」

「駄目なんだよ」

「成程、それではです」

ここまで聞いてであつた。ラディゲは落ち着いた声で述べた。

「では。私は間違いなくその化け物を退治できます」

「んっ、その化け物知ってるのか」

「まさか」

「いえ、知りません」

それについてはというのだ。

「ですが。退治はできます」

「退治したらかなりの額の報酬が出るぜ」

「酒も随分とな」

「ほう、酒ですか」

酒と聞いてであつた。ラディゲの目が期待するものになった。

「それは何よりです」

「それでは今から」

「行かれますね」

「はい、それでは」

こうしてであつた。ラディゲは意気揚々とその村に向かった。村は小さいものでありかなり荒れ果ててしまつていた。田畑もあちこちが乱れ開墾もされなくなつており家々も朽ち果てようとさえしていた。小屋も倒れて朽ちてしまったものばかりであつた。

そんな荒れ果てた村からだ。疲れきつた顔の老人が出て来て言うのであつた。

「冒険者の方ですか」

「そんなところですよ」

ラディゲはにこやかに笑つて答えた。

「バードです」

「あの、化け物を退治されに来られたのですね」

「はい」

老人の言葉に落ち着いた声で答える。

「その通りです」

「もう御存知だと思えますが」

「剣も魔法も通じないのですね」

「そうですね。何も通じません」

老人は弱った声で答える。

「ですから。誰が来られても」

「安心して下さい。倒せない存在はいません」

ここではあえて化け物とは言わないのだった。存在というのであった。

「ですから」

「ではどうされるんですか？」

「化け物は夜に来られるのですね」

いぶかしむ老人にだ。その落ち着いた声で問うた。

「そうですね」

「それはそうですが」

「では。夜まで休ませてもらいます」

平然としていた。動じたところも怯えたところも全くない。



### 第三章

そうしてだ。さらに話すのであった。

「では。そういうことで」

「左様ですか。では」

そんな話をしてだ。彼はまずは夜を待った。そして辺りが暗くなつたその時にだ。部屋を貸していた老人に対して問うのであった。

「さて、それではですが」

「化け物が出て来ます」

老人は困り果てた顔と声になっていた。

「そのどうしようもないのが」

「ですからどうしようもない相手はいません」

またこう言うラディゲだった。

「ですから御安心下さい」

「では何を使われるのですか？」

老人はラディゲに対していぶかしむ顔で問うた。

「それでは」

「はい、これです」

にこにことした顔で、であった。背中に背負っていたあのハープを持って来てだ。そうしてそのうえでまた老人に対して言ってみせたのだ。

「これを使います」

「ハープをですか」

「これを使います」

「あの」

それを聞いてであった。老人は顔をいよいよ曇らせた。そうしてであった。

「そんなものでは」

「無理だというのですね」

「死に行くつもりですか？」

ラディゲを本気で心配しての言葉だった。

「あの、本当に」

「ですから私は必ず」

「化け物を退治されるのですか」

「そうですね、お酒を用意しておいて下さい」

にこりと笑ってだ。余裕の笑顔での言葉だった。

「戦いの後で」

「お酒をですか」

「勝利の美酒です」

それだというのである。

「それをです」

「本当に大丈夫ですか？」

「今から行って来ます」

これ以上言わずにだ。そうしてであった。

「そういうことで」

「本気ですか」

「はい、本気です」

また言う彼であった。

「そういうことで」

こう話してそのうえで老人の家を出る。家を出ればその外は闇であつた。夜の闇がそこに広がり全てを覆い尽くしてしまつていた。

闇の中に見えるものは何もなかった。あるものは静寂だけだ。物音一つしない。他の家々も闇の中に消え何も見えない。ラディゲは今その闇の中にいた。

その彼は今耳を澄ませていた。そしてハーブに手をやっていた。そしてそれを手にしてだった。奏ではじめたのだ。

そのうえで村の中を静かに歩きはじめる。目が次第に慣れてきて家や小屋が見えてきた。やはりそこは荒廃しており朽ちようとしていた村だった。

そこを歩きながらハーブを奏でていた。するとだ。

やがて気配がした。左手の広い場所になつているところにそれがあった。無数の目を光らせているそれこそがだ。その化け物だった。

彼は無言でそのハーブを奏ではじめ歌を歌った。そのうえで少しずつ近寄つてくる化け物に向かつていた。それを受けているとであつた。

化け物の動きが次第に遅くなりだ。遂には動きを止めてしまった。そして静かに凍つていつてだ。最後には粉々に砕けてしまったのであつた。

全てはこれで終わった。何とラディゲは歌とハーブだけで全てを終わらせたのだ。朝その粉々に砕けて事切れている化け物を見てだ。老人をはじめとして村人達は驚きを隠せなかつた。

「まさかと思つたけれど」

「ああ」

「本当に倒すなんて」

「剣も魔法も通じなかつたのに」

「歌にも魔力があります」

そのラディゲがだ。驚く村人達に対して飄々と話してきた。ここでもそうだった。

「そう、私は氷の歌を歌い奏でていたのです」

「氷の歌ですか」

「聴くと凍るあの技ですか」

「あれは本来はゆっくりと聴くもので短い戦いしなければならぬ時は駄目ですが」

「それでもですね」

「この化け物には」

「使えました。そして実際に使いました」

「こう村人達に話すのである。」

「それで、です」

「それで化け物を退治したと」

「何と」

「驚かれることはありません」

「ここでもであった。飄々とした言葉はそのままであった。」

## 第四章

「このことはです」

「あの、しかし」

「何故歌で？」

「歌が利いたのでしょうか」

「聴こえるからです」

彼はにこりと笑って一同に話した。

「この化け物は音を聴くことができましたね」

「はい」

「それもかなり鋭かったです」

「だからです。それを使いました」

「こう話すのだった。」

「そういうことです」

「それでこうなったのですか」

「何と」

「音が聴けるからこそ」

「音が聴ける、それならば」

さらに話すラディゲだった。その言葉が続く。

「歌も音楽も聴けます」

「それならばですか」

「避けられないというのですね」

「はい、そうです」

まさにその通りだと。さらににこりとしていた。

「だからこそこうして退治できました」

「本当に退治できない化け物はいないんですね」

「まさかと思いましたが」

「こうして」

「聴こえるなら必ず退治できると確信しました」

ラディゲが指摘したのはこのことだった。

「そういうことです」

「うっん、剣も魔法も利かなくても」

「それでも退治できる」

「勉強になりました」

「それでは」

ここまで話してであった。ラディゲはさらに話してきた。

「約束通り」

「はい、お酒ですよね」

「それですよね」

「そうです。報酬は都で貰えますし」

このことも忘れていなかった。これで生計を立てているから当然である。

そのうえでだ。彼は村人達にこうも言ってきたのだった。

「それでお酒の他には」

「お酒の他には？」

「何をご希望でしょうか」

「私の歌とハープを聴いて下さい」

彼が今言うのはこれだった。

「宜しければ」

「歌とハープをですか」

「それをですか」

「村に平和が戻ったお祝いに」

それで歌い奏でるといっているのである。

「聴いてもらいたいのですが」

「あの、それでいいんですか」

「私達が聴かせてもらうだけで」

「どうか御願いします。バードというものはです」

彼のその職業についても話すのであった。

「聴いてもらったものですから」

「それでなのですか」

「ここで」

「はい、聴いて下さい」

また言う彼だった。

「どうかここは」

「わかりました、それでは」

「聴かせてもらいます」

「是非共」

老人も村人達もだ。笑顔で応えたのだった。

そうしてだ。ラディゲも彼等のその言葉を受けてだ。

「それでは」

「御願いますね」

「平和が戻った歌を」

「歌わせてもらいます」

老人や村人達に対して恭しく一礼する。その動作は優雅であるがそれでいてコミカルでもある。そうした実に不思議な仕草であった。

その歌はだ。実に見事なものだった。

この歌もそしてラディゲのこともである。その名を広く知られることになった。

「そうか、歌でもな」

「歌でも倒せるんだな」

「化け物もか」

このことも知られることになった。しかしラディゲは飄々としたままだった。そしてその顔で言うのだった。

「歌と音楽にできないことはありませんよ」

己のことではなくだ。その歌と音楽について言うのであった。

2  
0  
1  
0  
·  
5  
·  
3  
3  
1



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5406n/>

---

バード

2010年10月8日14時27分発行